

惹き付けられる魅力を肌で感じることに

十月一日(土)、美濃歌舞伎博物館・相生座にて、『令和四年 美濃歌舞伎公演』が二年振りに開催されました。

幕間には、美濃歌舞伎保存会会長である小栗幸江さんが舞台の上から、コロナ禍による二年間の苦悩とともに、本日開催することができた幸せ・喜び等について語られました。それを聴いていた客席は温かな雰囲気とともに話の結びには、大きな拍手に包まれました。

今回の公演は、昨日の『敬老公演』、そして本日の『長月公演』の二日間あり、それぞれ三幕構成になっていました。

第一幕 『青砥稿花紅彩画(あおとのぞうしはなのにしきえ)』

白波五人男・稲瀬川勢揃いの場

第二幕 『鬼一法眼三略巻(きいちほうげんさんりやくのまき)』

今出川菊畑の場

第三幕 『伽羅先代萩(めいぼくせんだいはぎ)』

御殿より床下

北中三年のO・Hさんが出演していることもあり、三十年以上振りに相生座を訪れることを楽しみにしながらも、時間の都合上、第二幕の終盤から第三幕の中盤まで鑑賞しました。

第二幕は終盤であったこともあり、情景もつかめないまま幕が下りてしまいました。そして冒頭記載の幕間のご挨拶を経て、第三幕の幕が上がりました。幕間に時間的なゆとりがあったことから、パンフレットを読み、大枠を理解した上で鑑賞できました。ただ、あらずじ把握の有無以前に、作品に惹き付けられ、作品の中に入り込んでいる自分がいました。

メリハリの利いた立ち居振る舞い(目線、指の先まで意識された動き)、見事な掛け合い、場面や状況による抑揚の付いた語り等、全てが複合して『美濃歌舞伎』の魅力として、観る者を感じさせるのだと思います。是非、生の公演を見てください。感じることを、思うことがたくさん溢れます。お薦めです。

今回、出演したO・Hさんに話を聴いてみました。以下が地歌舞伎をやるうとしたきっかけ、並びに今回の公演を終えての想いです。

☆私が地歌舞伎をやりたいと思ったきっかけは、小学四年生の時に、相生座で開かれた敬老公演を初めて見たことからです。その時に見た演目には、友達が出演していて、その友達が大きな舞台の真ん中で、堂々と大きな声で台詞を言い、見得を切り、役を演じている姿がとてもかっこよかったです。

私が実際に地歌舞伎に参加してみても、まず台詞の言葉一つ一つの言い回しが難しいです。そして、歩き方やお辞儀の仕方、細かい仕草等も普段はしないような動きでなかなかできませんでした。

しかし、先生方や周りの仲間が動き一つ一つを細かく教えてくださったり、確認してくださいます。今回の公演でも、言葉のイントネーションやその場面での自分の役の状態や感情なども教えてくださるので、初めはできなかったこともできるようになり、自分の役を演じ切ることができるようになりました。だから公演中も演じていて楽しいという想いをもつことができ、終えた後は達成感とともに、拍手を頂いた嬉しさでいっぱいでした。

今後、高校進学後も両立しながら続けていきたいと思っています。

今一番の願いは、歌舞伎を一緒にやれる人(小中学生)が多く出てくることです。

